白鷗小

# ねばり強く考えを深め合う子の育成

## ～子どもが解決したくなる、話したくなる働きかけの工夫を通して～（３年計画の３年次）

校　長　　寺　井　　健　司

### １　研究主題について

(1) 学校教育目標具現化のために

本校では、「生き生きした子」を教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、その具現化のための取組を続けている。教育目標を具現化するためには、県教育委員会の学校教育指導の方針と重点にあるように、「一人一人の子どもが、各教科及び総合的な学習の時間等において、主体的・対話的で深い学びを通して確かな学力を身に付けることができるよう、言語活動の充実を図りながら、一人一人の能力・適性に応じた指導と学習習慣の育成に努めること」が大切であると考える。また自分の考えをもって伝え合える場を設定し、話合いのさせ方や支援・手立ての在り方を工夫することは、生き生きと自分の考えを表現することにつながり本校で目指す児童像の実現に迫ることができると考える。

(2) 児童の実態から

昨年度は、ねらいに沿った問い返しを授業者が意識することで児童の思考を揺さぶり、話合いを焦点化させることができた。また、話合いの観点や「話し方の努力事項」を意識させることで、考えの足跡（思考過程）が生かされ、話合いの内容に深まりが見られるようになってきた。

しかし、話合いの場における児童同士の問い返しがあまり見られなかったことや、児童が自ら解決したい、取り組んでみたいという学びに向かう意欲に個人差が見られることが、課題として挙げられた。

そこで、今年度は副題を「子どもが解決したくなる、話したくなる働きかけの工夫を通して」とし、学ぶ意欲を高めるための課題決定までの工夫や話合い活動の工夫について研究を進めていく。前年度まで積み重ねてきた内容を継続しながらも、さらに生き生きと自分の考えを表現する児童の育成を図っていくことで、ねばり強く考えを深め合う児童の育成につながると考える。

(3) 「ねばり強く考えを深め合う」とは

「何を理解しているか、何ができるか」という生きて働く「知識・技能」を習得させ、「理解していること・できることをどう使うか」という未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を育成していくことが深い学びにつながると考える。「自分一人で分かったつもりになっていても、他者に説明してみたらうまく言えなかった。」「他者の話を聞いたら自分の気付かなかったことが分かった。」などの対話的活動を通して学びが深まると考える。また、学習内容を理解し記憶することも重要だが、それを通して新たな事象に対する見方を形成し、「自分なりの見方・考え方」ができるようになることも深い学びととらえる。そして、このような取組を日常の授業の中で継続して行うことが、確かな学力の育成につながると考える。これらから、本校では「ねばり強く考えを深め合う」ことを、次のようにとらえる。

ア　お互いに納得できるまで話し合い、学びを深めること。
イ　お互いに気付かなかった新しい視点を獲得できるまで、学びを深めること。
ウ　お互いに新たな事象に対してよりよい考え方ができるまで、学びを深めること。

### ２　研究のねらい

ねばり強く考えを深め合う子を育成するために、子どもが解決したくなる課題提示の工夫や自分の考えを進んで話したくなる話合い活動の工夫はどうあればよいか、算数科の授業実践を通して明らかにする。

### ３　研究仮説

子どもが解決したくなる、話したくなる働きかけを工夫することにより、ねばり強く考えを深め合う子を育成することができる。

### ４　研究内容

(1) 課題設定までの働きかけの工夫

ア　児童の思考にずれを生じさせる課題提示（しかけ）の工夫
イ　立場の相違を可視化・顕在化する場面を設定し、問いの意識をもたせる場面の工夫

(2) 話合い活動の工夫

ア　グループ構成を考え、観点を焦点化して話し合わせる工夫
イ　他者と考えたり表現したりする場を設定し、考えの共有化を図る工夫

## ５　研究の経過

(1) 研究の仮説に基づく授業研究

| 月 | 日 | 学年・授業者・題材名 |
|---|---|---|
| 7 | 13 | 第１回授業研究（５学年）題材名「合同な図形」<br>授業者　櫻庭　信純　指導助言　総合教育センター　松橋　祐哉　副所長兼主任指導主事 |
| 11 | 2 | 第２回授業研究（１学年）題材名「ひきざん（２）」<br>授業者　佐々木靖子　指導助言　総合教育センター　松橋　祐哉　副所長兼主任指導主事 |

(2) 一般研修

| 月 | 日 | 内容・講師・概要等 |
|---|---|---|
| 6 | 1 | 心の架け橋研修「特別な支援が必要な子の共通理解」<br>生徒指導部 |
| | 22 | クロムブック活用研修　「授業で使えるクロムブック」<br>講師：総合教育センター　石井　一二三　主任指導主事 |
| 10 | 19 | 特別支援研修　「通常の学級における特別な配慮を必要とする児童の指導」<br>講師：八戸市教育委員会子ども支援センター　横沢　吉則　主任指導主事 |

## ６　研究の成果

(1) 問題の一部を空欄にし計算を想像させたり、既習の方法では解けない問題を提示したりするなど、児童の思考に「ずれ」を生じさせる課題提示の工夫をすることによって、問いの意識を芽生えさせることができた。

(2) ネームプレート等を活用して、立場の相違を可視化・顕在化する場面を設定し、問いの意識をもたせることによって、全体の思考の傾向を児童自身が把握し、解決したい「問い」として自覚し、問題に取り組むことができた。

(3) 話合いで出されたいくつかの考え方を焦点化された観点で話し合わせることによって、相手に分かりやすく・伝わるように話そうという意欲を高めさせ、話合いの活性化につながった。

(4) ペア学習やグループ学習の際に、他者と考えたり表現したりする場を設定し、考えの共有化を図る工夫をすることによって安心感が生まれ、話したいという意欲とねばり強く課題に取り組む態度を育成させ、理解を深めることにつながった。

(5) 課題解決の途中で、分からない部分を「分からない。」と言える児童が増え、つまずいている子に進んでアドバイスをする児童が増えた。今年度の「解決したくなる、話したくなる働きかけ」の取り組みにより、温かい雰囲気の中で、児童同士、児童と教師の関わり合いを大切にした授業が展開された。

## ７　研究の課題

(1) 導入場面で児童の思考に「ずれ」を生じさせる際に、予想される児童の反応を超えるような「しかけ」が用意されると、児童の思考に混乱を招く恐れがある。「しかけ」を考える際には、児童の発達段階や予想される反応を吟味する必要がある。

(2) 全員が共通しためあてをもって問題解決に取り組むためには、「今までのやり方では解けない。」という困り感を共有することが大切である。困り感を共有し明確にしていくための働きかけが必要である。

(3) 対話の力を高めさせるために、話す力の育成だけでなく、聞く力の育成も並行して進めていくことが課題である。安心して話すことができる学級を作るために、日常的に聞く態度や環境を整える必要がある。

(4) 教師の問い返しにはよく反応し、考えを深めてはいるが、児童同士の問い返しについては改善の余地がある。今後は、児童同士の問い返しの手立てを明確にし、日常的に児童に指導していくことが求められる。

（記入者　松尾　亮祐）